町田康著『口訳古事記』
（講談社）

昨年から今年中に読んだ本の中で私にとっては一番面白かった著作である。

「口訳」とあるのだから「古事記」の原本に添って、私達が子供のころから馴染みのある伊耶那岐命と伊耶那美命による国造りや四方津比良坂の遁走劇、天照大御神と須佐之男命の角逐、大国主命と因幡の白兎、天孫降臨、日本武尊の活躍などが繰り広げられる。神の名やストーリーは原作の古事記に忠実でありながら登場人物の発する言葉は概ね関西弁で、男神は「ワレどこのどいつや」と叫ぶ浪速のオッチャンであり、女神も「わたし急いでますのやで」などと大阪のオバハンである。

この本を読んで面白くなかった人は相性が悪いのだと思って町田康の本は再び手に取らないで下さい。

この型破りな口語訳を面白いと思った人は、この作者の初期の作品である「きれぎれ」（芥川賞）「土間の四十八滝」「権現の踊り子」や「ギケイキ」等も読んで下さい。昨年は第一歌集「くるぶし」も出ています。**（鮎川　清）**

吉田修一著『国宝』
（朝日新聞出版）

『国宝』は、歌舞伎の世界で生きた二人の物語である。幼い頃に母を亡くし少年院に入った喜久雄は、やがて歌舞伎の世界でその才能を輝かせていく。一方、歌舞伎の名門の家に生まれ、育てられた俊介は、自らの芸に対する自信を持てず、背負わされたものの大きさに悩む。

私は五十年余り歌舞伎を観てきたが、観劇の一つの面白さは役を代々の役者が演じるところにある。七代目尾上梅幸が演じた『伽羅先代萩』の政岡は役の年齢に相応しい温かみがあった。その政岡を坂東玉三郎は若く華やかに演じた。美しさの中に喩えようのない悲しみがあり、今までにない政岡だった。継ぐということは守るということではない。新鮮な風を入れて芸は繋がれていく。

喜久雄と俊介は深い友情で結ばれ、各々が懸命に生き、芸を完成させてゆく。人生は何かを捨て何かを得ることの連続である。『国宝』は、伝統ある芸を継ぐ、ということの意味と共に、生きるということの奥深さと素晴しさも伝えてくれる。**（矢沢靖江）**